

かぐらおが

第 46 号

昭和61年1月1日

編集 旭川医科大学
厚生補導委員会
発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 心理学 土肥 聡明)

初雪のナナカマド

短い論文と長い論文……………牧野 幹男 …… 2	研究室紹介 (動物実験施設) ……安孫子 保 …… 6
歯科口腔外科学講座の開設にあたって	課外活動報告 (第28回東医体冬季大会) 蒔田 芳男…6
……………北 進一 …… 3	体育大会…………… 7
新任教官紹介	新入生研修 (第2回目) …… 7
谷本教授を迎えて……………内田 倅喜 …… 4	解剖体慰霊式…………… 7
就任にあたって……………谷本 光穂 …… 4	課外活動短信…………… 8
昭和60年度通学方法・居住状況調査結果一覧… 5	窓 外……………平塚 寿章 …… 8



短い論文と長い論文

牧野 幹 男

30年近くも前の話になるが、当時ニューヨークにいた私は、ある日日本のH大学からの生理学のF教授をお迎えし御案内することになった。私には全く未知の方が、私の友人でH大出身のO君に頼まれてのことだった。どうしても休暇のとれないO君の頼みを聞いて、休暇に入ったばかりでルンルン気分の私は即座に断ったが、F教授がいかにも尊敬できる教育者、研究者であるかを熱心に説明するO君の熱意に根負けしてしぶしぶ承知した。それから2日間、車を駆ってあちこち御案内したが、F教授は風景などには余り関心がないらしく、どのような場所でも私の説明にうなづかれるだけで、一切ノー・コメントであった。その代り、論文の書き方についていろいろ説明して下さった事を記憶している。彼によれば今の人達の書く論文は大変長すぎて余計な修飾が多く、しかも要旨が不鮮明で不適格なものが多いと云うのである。医学雑誌はいわば公共のものであり、個人が独占すべき場ではないという事を忘れてしていると嘆かれていた。例としてEinthovenの心電図の正三角形理論の発表は、たった1枚の論文であったことを教えて下さった。

2日後、ある研究会場の前で、到着した彼のお弟子さんにF教授を引き渡して私の役目は終わった。ついでに彼の研究発表を拝聴すべく私も会場に入った。英語はあまりお得意ではなかったのか、発表はお弟子さんが代読するという形で行われた。驚いた事に、その発表と質疑応答の間、F教授は講演者席の真横に直立不動の姿勢で立ち、聴衆の反応に目を注がれていた。私はその姿に一種の爽やかな感動を覚えた。O君の言った通りだと思った。

数日後、私は大きな図書館にもぐり込んで、Einthovenの発表はたしかに1枚の論文であったことを確認した。

しばらく前に、ある疾患の病態に関して、ある著名な老大家の論説を読んだ。その中で“日本の学者はあまり勉強し過ぎる。他の書いたものなど読まない方がよい”という一節に出合っただけでびっくりしてしまった。老大家によれば日本の学者の論文は、どこの誰かが何と云っている、こちらの人はこういう事を云っている、あちらの人はあ・云っているなど、他人の意見ばかり気にしており、そのことに気をとられて自分の主張が鮮明でないやうである。他人の意見など気にせず、自分の信ずる所を鮮明にせよと叱っているのである。あちらこちらの論文を読んで、無駄な勉強をするのは骨折りの損のくたびれもうけだというわけだが、これは全く逆説的な表現であることは明白である。

私の先輩N教授は猪突猛進型で、普段は大変良い紳士なのだが、何かを思い込んだら命がけという所がある。そういう時は他人の批判に聞く耳なしという風情があって、彼の書く論文は思うことを細大もらさず、すべてを書き込まなければ気がすまないのである。ある時彼は一つの論文を書きあげて私に見せてくれた。ごく一部分を少しお手伝いしたからである。私はその長さとしつこきに辟易して、内心では半分以下の長さでよいのではないかと思っただけで、後輩が批判がましいことを云うのは恐れ多いので、大変結構ですとお返しした。ある雑誌に投稿した所、案の定、長すぎるので半分位にしてほしいと編集者から返事があった。激怒した彼は直ちに上京して編集者に会い、直談判に及んでついに全文掲載を承知させ、意気揚々と帰って来た。私にはその談判に應じた編集者の困惑ぶりが目に見えるようで、苦笑を禁じえなかった。

G大学の友人、K教授は血中のある微量成分の精製とその性質の解明に長いこと熱意を燃やしている。そのきっかけになったのは、はるか以前にある雑誌に発表された論文に、その微量成分が明瞭に分画されている泳動像を見たことであつた。早速同じことを試みようと思ひ、実験材料・方法の項を見ると、「前報に記載した方法」とあるだけで、泳動支持体の組成の詳しい記載はなかった。通常の組成の支持体では、絶対に分画されないことは、彼には経験済みであつた。そこでその前報を見ると同じように「前報の方法」とあるだけであつた。さらにその前報をとり寄せて見ると、再び「前報の……」というわけと同じことの繰返して、ついに目的の組成を見つけて出すことは出来なかった。結局彼自身で色々の組成の組合せを試みて、ようやく一応の分画、精製に成功するまで、3年以上の年月を要した。という話を笑いながら私に語ってくれた。

論文の書き方にも個性があり、それぞれのスタイルがあるが、要約すれば必要な要点は確実に、論旨は簡潔で明確にということにつきるのであろう。

前任の石橋教授の副学長御昇任に伴ひ、急遽図書館長を命ぜられた。本学の図書館は新設医大の中では、蔵書数が最も多く勝れた図書館であることを知り、大変誇らしく思っている。しかし同時に財政上の困難に直面していることを知り、任務の重大さを痛感している。

(図書館長・検査部 教授)



歯科口腔外科学講座の開設にあたって

北 進 一

今年の夏休みも終り、新学期が始まって殊のほか浮かぬ顔をしている5年生の皆さん、心よりご同情申しあげます。歯科口腔外科が講座になったために、必修科目が1つ増え、それに伴ない試験科目も1つ増えたからであります。時折しも講座としての初講義は9月13日の金曜日、なんとも縁起の良い日でありまして誠にご愁傷さまでございます。

さて、振り返ってみますと、本学附属病院の歯科口腔外科診療科は昭和51年11月病院の開院とほぼ同時に診療を開始いたしました。しかし科長が不在のため、当時、副学長・病院長の黒田一秀教授(泌尿器科学)が当科の診療科長を併任されており、実際の診療は北大歯学部口腔外科より数名の医師が配属されて、歯科技工士、看護婦と共に担当しておりました。

私が当科の科長として着任したのは、開院1年目の昭和52年11月1日付であります。外来診療室はまだ完成していない状態でしたので、急拠各種器械・器具の設置・整備のために、関係部局の間を毎日のように走り回ったことが憶い出されます。

一方、人事については北大歯学部、弘前大学、愛知学院大学歯学部の各口腔外科より、講師、助手を迎えることにより教官定数(5)を充足させることができました。しかし講座でないため教官定数は少ない、研究費はない、事務官もいない、研究室もない、と無い無いづくしの生活でしたが、そのうち事務官を配属していただき、科学研究費が当り出し、地方会学会を担当し、医員・研究生が増え、他病院での出張手術が増し、その謝金を巻きあげて試薬などの実験消費費に当て、さらには学長、機器センター長の苦苦しい顔を横目に、機器センター5階の研究室を強引に間借りして居座るに至りました。

そうこうしている内に早くも7年が経過し、この間附属病院の診療科として入院患者、職員、学生の歯科治療と、学外的には顎・顔面の外傷、口腔に発生する良性・悪性の腫瘍、口唇裂・口蓋裂などの奇形、顎骨の發育異常、口腔粘膜疾患、ならびに顎関節疾患などの口腔外科的疾患の他に、近年の高齡化社会に伴なう成人病患者、各種の障害者、全身疾患保有者の歯科治療など、病院歯科としての役割もまた極めて大きく、地域医療分担の上に必要な責務を僅かながら果たしてまいりました。

この度、附属病院の歯科口腔外科診療科に対応する講座が設置されましたことは、本学教授会の深いご理解と事務局のご尽力の賜であり、ここに深甚なる謝意を表し

たく在じます。歯科口腔外科学講座といっても、厳しい世状のため教官定数は現状のままで辛いところもありますが、これを機に学生教育に対する責務を果たすべく、また診療の発展を期すべく一層の努力を重ねると共に、充実した教室作りに専心いたしたいと思っております。

講座設置に対して、ご協力いただきました皆様に対し、改めて御礼を申しあげまして、開講に際してのご挨拶といたします。

(歯科口腔外科学講座 教授)



新任教官紹介



物理学
教授 谷本光穂

昭和39年3月 北海道学芸大学
札幌分校卒業

昭和41年3月 北海道大学大学院理学研究科修士課程修了
昭和43年4月 同上 博士課程退学
昭和43年5月 北海道大学応用電気研究所助手
昭和56年11月 長崎大学教育学部助教授
昭和60年8月 旭川医科大学医学部教授に就任

谷本教授を迎えて

内田 倭喜

一般教育物理学教室は昭和48年の本学開学とともに発足し、カリキュラムの作成、建築、入学試験、学生の受入れ、授業開始と忙しい創設期を過ぎてきました。以来12年を経て担当教授であった星野了介先生をついこの春、お送りしたばかりであります。

この度、8月16日付をもって、新しく谷本光穂氏を物理学担当教授としてお迎えしました。この事は本学も次の時代に入りつつある事を意味するものであり、個人的にも一回りお若い氏を同僚として迎え、感慨深いものがあります。

谷本教授は昭和16年東京に生れ、終戦後間もなく札幌市に移住されました。昭和39年北海道学芸大学札幌分校を卒業され、北海道大学大学院理学研究科物理学専攻に入学されました。そこで星野先生の研究指導を受けておられましたが、博士課程の途中で応用電気研究所物理学部門の助手として望まれ、昭和43年同課程を退学されました。以来昭和56年まで NMR 及び ESR といった磁気共鳴を主たる研究手段として、物質のミクロな磁性を研究して来られました。谷本教授は世界的に関心の高い新しい型の磁性体、スピングラスの生因に関する詳細な研究により国の内外から高い評価を受けておられます。昭和56年長崎大学教育学部に助教授として迎えられましたが、学部性格上研究の機会に恵まれず、毎夏北上、古巣の応電研を訪ねて研究を続行して来られました。縁あって本学に赴任された谷本教授は本学機器センターの充分な利用と応電研との研究協力による活発な研究態勢の確立に強い希望を託しておられます。

谷本教授は上述のように極めて研究熱心な実験物理学者であると同時に、その出身及び経歴から教育者としても充分な素質と実行力をもっておられます。本学に於ける最年少教授として、教育と研究に今後一層の研鑽努力と御発展を心から期待するものであります。

(化学 教授)

就任にあたって

谷本 光穂

例年にない全国的猛暑といわれたこの夏、本年3月をもって停年退官された星野教授の後任として、8月16日付で物理学教室に着任いたしました。前任地は長崎大学、そしてその前は北大応電研に在職いたしておりました。

札幌育ちの私にとって南国長崎での4年間は年間を通じて湿度が高く閉口いたしました。冬はほとんど積雪がなく、雪が大変恋しく思われました。しかし、朝寝坊の私にとって恐怖の早朝「雪かき」からの解放は、何ものにも替え難い幸せでありました。雪国旭川は、典型的な内陸性気候で年間の気温差が著しく大きく、余りの環境の違いに些か戸惑っているところです。しかし、研究室から見える雄大な大雪山系と、春夏秋冬といった季節感のはっきり感じられる北海道はすばらしいと思います。鮮明な季節感生活にめりはりができ、研究面でも新たなファイトが湧いてきます。とはいいながら、ゴキブリからの解放された喜びを味わいつつ、再び「雪かき」への挑戦を試みなければならないと、ぼちぼち降り始めた雪空を恨めしく見上げております。

私は北大応電研在職中より一貫して、磁気共鳴特に電子スピン共鳴(E.S.R.)を主な測定手段とした化合物磁性の研究に取り組んでおります。一方、長崎大学(教育学部)在職中は「物理教育」という私にとっては新しい研究分野にも取り組んでまいりました。旭医大には当然の事ながら「医学」という私にとっては全く異った御専門の多くの諸先生がおられます。諸先生方との議論を深める事により、又実験実習機器センターという優れた研究施設を大いに利用させていただく事により、研究の幅を広げ、ゆくゆくは旭医大に根ざした研究に発展させていきたいと考えております。

さて、星野前教授は旭医大創設期より大学運営に参画されてこられました。そして、旭川医科大学物理学教室という種を蒔かれ、御停年までの12年間大切に育ててこられました。これからは、この若木を旭川の風雪に耐え得る大樹に育てていかねばなりません。幸いな事に、研究室のスタッフである晴山助教授、安濃教務職員、事務官の源長嬢は皆創設期より在職しており大変心強く感じております。着任してまだ3ヶ月余りで具体的なビジョン、抱負を述べる事はとても出来ませんが、研究室の平均年齢は少人数ながら(37才)と非常に若く、この若さを結集して教育、研究等の各方面に多に飛躍したいものと念じております。どうぞよろしく願いたします。

(物理学 教授)

昭和60年度通学方法・ 居住状況調査結果一覧

昭和60年度通学方法・居住状況をまとめましたので掲載します。

(学生課)

アンケート提出数

昭和60年6月1日現在

学 年	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	計
在籍学生数	131	127	140	111	127	115	751	9	13	11	16	49
アンケート提出数	128	109	118	92	101	76	624	9	5	8	7	29
提出率(%)	97.7	85.8	84.3	82.9	79.5	66.1	83.1	100	38.5	72.7	43.8	59.2

通学方法のまとめ

学 年	学 年						計	大 学 院				
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	計
徒 歩	60	18	25	13	9	10	135 (21.6)	1			2	3 (10.3)
自 転 車	43	46	33	18	18	3	161 (25.8)					
バ ス	16	5	5	4	4		34 (5.4)	1	1			2 (6.9)
バ イ ク	任意加入	2	7	5	11	10	41 (6.6)					
	非加入	2	14	8	10	6	44 (7.1)					
自 動 車	任意加入	1	13	31	25	46	156 (25.0)	7	4	8	5	24 (82.8)
	非加入	1	1				2 (0.3)					
自動車相乗	2	5	11	11	14	7	50 (8.0)					
国 鉄	1						1 (0.2)					
計	128	109	118	92	101	76	624	9	5	8	7	29

()内は%

居住状況のまとめ

居住状況	学 年						計	大 学 院					
	1	2	3	4	5	6		1	2	3	4	計	
自 宅	13	19	16	14	21	13	96	2	1	1	1	5	
親戚又は知人宅	2	1	1			2	6				2	2	
下宿 (光熱水料込み)	~4.5畳	~40,000			1		1	2					
		~45,000		1	1			2					
		~50,000											
		50,001~											
	~6畳	~40,000	2	2	4		4	12					
		~45,000	32	18	25	21	15	7	118				
		~50,000	6	16	3	1	6	3	35				
		50,001~	3	3		2	1		9				
	~8畳	~45,000	5		3	4	1	13					
		~50,000	12	1		1		1	15				
		~55,000	2	1			2		5				
	8畳~	55,001~	1			1		2					
~45,000		1			1		2						
~50,000		1		1			2						
8畳~	~55,000	1					1						
	55,001~			4		1	5						
	~20,000	3	2	1	1		7						
~6畳	~30,000	3	2			5	4	14	1	2		3	
	~40,000	2	1				3						
	40,001~												
間借・アパート	~20,000	2	2	1	2		2	9					
	~30,000	11	12	16	12	12	7	70					
	~40,000	17	12	16	4	6	11	66	1	4		5	
	40,001~	3	5	1	1	1	2	13					
バ イ ト	~20,000			2	2	4	2	10					
	~30,000	3		4			7						
	~40,000	4	6	13	10	10	13	56	3	1	2	6	
	40,001~		1	1	2	1	5						
18畳~	~20,000			1			1						
	~30,000					1	1	2					
	~40,000	2	1	5	5	4	3	20			3	3	
	40,001~	3		3	1	1	8	1	1		2		
借 家	~20,000												
	~30,000												
	~40,000												
	40,001~												
18畳~	~20,000			1			1						
	~30,000												
	~40,000												
	40,001~												
道営・市営住宅				1	1	2				1	1		

研究室紹介

■ 動物実験施設 ■

安孫子 保

推理つきの動物実験を

人の前で話をする時には、誰でも緊張するものである。私も生れてはじめて学会で発表した時には、足のふるえがとまらなくて困ったものである。最近の学会でも似たようなことを経験した。若い人の発表であったが、発表のあとに予期せぬ質問がたくさん出て、彼の顔色は次第に青ざめて行った。彼にとって一番きつかった質問は、「なぜその実験をやったのか」という質問であった。彼は困り果てて、「実は教室の方針なので、この実験をやりました。」と云ってしまった。会場から爆笑があって、彼はやっと無罪放免、自由の身となった。緊張していなければ、もっとうまい答え方をしていたと思うが、彼はつい本音を云ってしまったのである。私はこの事実を笑えない現実として受けとめた。

一体、実験とは何であろうか。何のために実験をするのであろうか。クロード・ベルナルは彼の名著「実験医学序説」の中で、観察と実験を区別して議論している。「観察は示し、実験は教える」という表現で両者を区別している。いま、ある患者が来院したとする。医師はたくさん検査と綿密な診察をすることによって、その患者の病状を知る。これはあきらかに観察であって実験ではない。次に観察することによって知り得た現象の意味を考え、その病状のおこるメカニズムを知ろうとする。ここに実験の必要性が出てくる。ベルナルの云うように、実験というものは観察をもとにして立てた推理を検証するためのものである。つまり推理のない実験はあり得ない筈である。

さて、私共は実験に関するこの考え方ははっきりと理解して実験しているであろうか。時には「教室の方針だから」という理由で、十分な推理を行わずに実験をしていることがないであろうか。

本学は山田守英前学長と水戸勉郎初代施設長のおかげで、立派な動物実験施設をもち、その運営を行なっている。田中講師以下13名の職員が動物の飼育管理のために働いている。相手が生き物であるから、仕事は大変である。これら職員の生き甲斐は、自分たちが育てた動物が医学の研究に役立っているということである。もっと直接的な表現をすれば、これらの動物が先生方の学問的推理の検証に役立っているということである。どうぞ推理つきの動物実験をたくさん行なって、医学研究のために貢献していただきたい。

なお、動物実験施設を利用される時には、中谷技官（内線 2658）に一度相談されることをおすすめする。先生方の御希望がすべて叶えられるとは限らないが、できるだけ叶えられるよう努力するつもりである。

（動物実験施設長・薬理学講座 教授）

課外活動報告

シリーズ 8

第28回東医体（冬季大会）主管

第5学年 蒔田 芳男

本学が第28回の東医体冬季主管校であることを知っていますか？。実は、旭川医大の主管のもとでラグビー部門がすでに終了し、主管業務は既に始まっているのです。

当運営委員会は、昨年10月中旬、第5セミナーの片隅を陣どって準備を開始しました。東医体と言えども、旭川医大の学生の組織嫌いの例にもれず、運営委員は現在でも7名のまま、短期集中でなんとかやっています。

今回の大会は、冬季4種目のうち、ラグビーとスキーを本学が主管しますが、スピードスケートは札幌医大、アイスホッケーは東京医大に移管という概況です。

運営委員会の存在を知らないで東医体に参加している方も少なくないと思いますので、ここで少し触れたいと思います。運営委員は、「東医体の裏方」この一言に尽きます。会場日程の設定、後援とり、宿泊交通、保険、部門の賞状 etc. 東医体の場で誰がやっているかわからない内容が全て運営委員の業務になります。「過去11回旭川医大は、主管校に同じような仕事を強いてきたわけだから……」と思ってみても、東医体の主管は35年に2回しか来ないわけで、私たちは「何て不運なのだろう」と思わず考えてしまう今日この頃です。



本学は、ラグビー部門で4位となり、また、来年3月スキー部門富良野大会では、スキー部の活躍が期待されます。冬季の総合は、昨年本学が優勝しており今年の行方が気になります。35年に1回の冬季の主管です。来年3月に富良野へ行ってみませんか？。分化してしまった夏季大会と異なり、参加人数が東医体で最も多い閉会式とレセプションがあります。たぶん昔の東医体の姿がそこにあると思います。東医体の源は、「みんなの運動会」なのですから。

（第28回東医体冬季大会 運営委員長）

体 育 大 会

学生主催の体育大会が9月4日(水)及び8月31日～9月11日の昼休みを利用して行われた。9月4日はあいにくの雨のため有志対抗のソフトボールが中止となったが、他の種目はほとんどの学生が参加し、各チームとも優勝をめざし善戦健闘した。結果は次のとおり

学年対抗

サッカー	1位4年	2位3年	} 総合 優勝 3年 2位 1年
バスケット	1位4年	2位2年	
すもう	1位3年	2位1年	
つな引き	1位3年	2位4年	
駅伝	1位5年	2位2年	
2,000mリレー	1位3年	2位1年	

有志対抗

バレーボール	1位 負けていいとも	PAPTVI
	2位 いも虫ブーブー	
ソフトボール	雨のため中止	

(学生課)



新入生研修(第2回目)

4月に行われた第1回目の研修に引き続き第2回目の研修が10月28日(月)～11月1日(金)(水は除く)までの4日間、福利厚生棟和室及び職員研修施設に於て行われた。

研修は、1年生全員を対象に8つのグループに分け、教授2名、学生16名を1グループとして、午後5時10分から約2時間

①前期試験終了に伴い、今後の修学上の問題

②学生生活上の問題 ③人生問題

を中心に懇談が行われた。

(学生課)



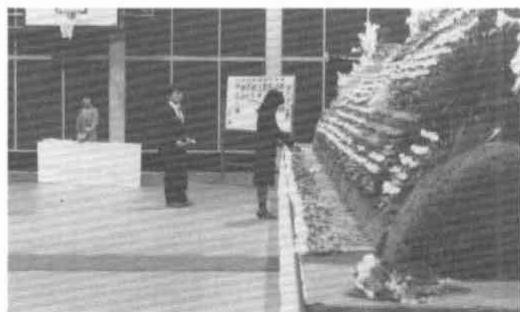
解剖体慰霊式

昭和60年度解剖体慰霊式は9月25日(水)午後1時30分から本学体育館において執り行われました。

式に参会した御遺族・来賓・本学教職員・学生(第3学年)400名は、本学学生の教育及び学術研究のために尊い御遺体を提供され、医学発展の礎石となられた184名(病理解剖87名、法理解剖63名、系統解剖34名)の方がたの御遺徳を忍び御冥福を祈念しました。

解剖体御芳名奉読、黙とう、学長・学生代表(3年井内裕満)の追悼の辞のあと、参会者による献花が行われ、石橋副学長の謝辞をもって、しめやかなうちに今年度の慰霊式が終了しました。

(学生課)



課外活動短信

ラグビー部

8月 - 27

東日本医科学生総合体育大会(冬季)ラグビー部門
(於 旭川医科大学グラウンド)

成績 4位

2回戦	62 - 4	(独 協)
準々決勝	18 - 6	(東 医)
準決勝	3 - 10	(新 潟)
3位決定戦	0 - 18	(群 馬)



窓 外



平塚 寿章

ブダペストの研究室

医学を含む自然科学系の研究者に“国外留学”と言ったら、10人中8人までがその留学先として米国を連想するだろう。さらに大部分の人々は、研究室の設備や研究費の面で日本よりも米国の方が一般に恵まれていると感じているに違いない。事実、過日米国 NSF の研究費配分審査委員を依頼された時、申請されている一研究室の年間予算が人件費を除いても何千万円という額になるのを見て驚いた。これを見ているといつの間にか、“外国の研究室—米国の研究室—日本の研究室より総てにおいて恵まれている”という短絡的な固定観念に囚われてくる。これは更に、“研究費と設備に恵まれてさえいれば必ず素晴らしい研究成果が得られるに違いない”という本末転倒の妄想にまで発展する。ところが、ハンガリーのブダペストにある一化学研究室での昨年の体験は、こんな妄想を粉微塵に打ち砕いてくれた。

ハンガリーは東欧の中央に位置し、ドナウ河によってほぼ中央を東西に分かたれ、東部にはハンガリー大平原が広がっている。西はオーストリア、北はチェコスロバキアとソ連の一部、東はルーマニア、南はユーゴスラビアに囲まれている。人口は約 1,100 万人で、首都ブダペストには約 200 万人が住んでいる。一説によれば、ハンガリー民族はその昔フン族等と前後して西シベリア地方より移動してきたといわれ、今日のハンガリー人は印・欧系民族ではなくアジア系のウラル・アルタイ民族である。日本人は彼らの尊敬すべき親戚であるといわれて、

どこへ行っても親切にされ、息子達は何度も頭を撫でられた。彼らの言語マジャール語は他の欧州各国の言語とは似ても似つかず、むしろ日本語に似ている構造もある位である。例えば、氏名は姓を先にし名を後にして、年月日、住所の書き方も日本語と同じ順序である。英語などは街ではほとんど通じないので、リスト音楽アカデミーの国費留学生としてブダペストで暮した経験のある妻を通訳兼ガイドとして、私と息子達はアヒルの子よろしく彼女の後について回ったものである。

私が現在専門にしているミオシンの研究はその昔ハンガリーのアルバート・セント=ジェルジにより始められた。その後彼は米国へ亡命したが、彼の弟子達は自国に残り、現在生化学の各分野で指導的役割を果たしている。私を通ったブダペストの大学の生化学研究室は、現在でもミオシンの研究を続けている。ところが研究室に入ってみて驚いた。日本の研究室ならどこにでもある分光光度計等の測定機器がまるで見当たらないのである。複写機なども全くなく、一台しかない手動のタイプライターにカーボン紙を挟みコピーをつくる。日本でなら安価なアクリル製品に過ぎない電気泳動装置すらなく、彼らはガラス板でこれを作り、接着剤が生々しく付着している装置を使って実験をしていた。後で開けて見せてくれた戸棚の中には、分光光度計をはじめとする手製の機器が大切に保管されていた。工業化が遅れているこの国ではポリバケツさえも貴重品である。研究費が少ない上に外貨制限がきびしく、外国製機器を買うことなどは彼らにとって夢のような話であろう。

ハンガリー人が学術研究の各分野で多大の貢献をしていることは、今世紀に入ってからノーベル賞を授与された学者が5人もいることから窺われる。現在とすれば“金が絶た”と考えがちな研究者の多い日本で、“まず自分の頭脳でその研究に最もふさわしい方法を創造し、その残りを金銭で補うのが研究である”と言ったブダペストの一研究者の言葉を時々かみしめるのである。

(化学 助教授)